



感性&体験型研修

創造性発揮、チームワーク向上、多様性理解などを目的とした感性や身体に関する研修について、東京理科大学の井藤元先生と編集部員がプログラムを体験し、そのナゾを解き明かしていく随時連載。今回は、一般社団法人森と未来が提供する「TIME FOREST Program」を体験してきました。

森のなかを歩くことで個人、そしてチームにどのような変化が訪れるのか。「プログラム内容」（編集部）と「プログラム解説」（井藤先生）からみていきます。

随時連載 | 第 5 回

TIME FOREST Program



プログラム内容

「TIME FOREST Program」について

森がもつ効果を活かして、感性を育てることを目的とした人材育成のプログラム。「森」のなかで自身に意識を向け、他者と協力し、対話することで、感性を目標めさせるほか、脳疲労の回復、身体・思考のリセット、創造力の向上などを促していく。法人向けプログラムのほか、地域向け、子ども向けのプログラムなどを実施。法人向けプログラムの実施企業は15社25回（2024年8月現在）。

期待される効果

- 自己内省、他者理解
- 潜在的に備えもつ感性への気づき
- 新しい視点、アイデアの創出
- 自然体になる感覚
- リラックスandリスタート
- 自己肯定感、自己効力感の向上
- 感性による対話力の強化、共感力の強化

今回受講した「TIME FOREST Program体験会」

森での研修に興味のある人事・教育担当者を対象とした、約6時間のプログラム。開催場所は、山梨県北都留郡小菅村。

森と未来が提供する「TIME FOREST Program」は、「森」の空間を学びに変えることで、「森の多様性と循環を、個と組織の活力」につなげていくものである。

具体的には、森に入り、そのなかをゆっくり歩くことで、自己を内省し、思考を休め、感覚に意識を集中することで、本来その人がもっている感性を最大限に活かせる状態をつくり出していくことを目指す。法人向けサービスとしては、健康経営やチームビルディング、個人の感性や内省への働きかけ、自己理解・他者理解の促進など、企業課題・目的によってさまざまなプログラムを提供している。

森をはじめとした野外を活用した研修は数多くあるが、そのなかで森と未来が提供するプログラムは、

森で過ごす時間を通じて、五感に意識を向けながら自分の感情や記憶と丁寧に向き合っていくこと、そして、ただ「森に行った」で終わらせるのではなく、森を介して地域と参加者をつなぐことで、持続的な関係性の構築を目指していることが特徴となる。

ここでは、体験会のプログラム（図表）から、**1** オリエンテーション、**2** TIME FOREST Program、**3** 振り返りワークについて、その内容をお伝えする。

1 オリエンテーション

体験会当日の天気は雨だった。参加者は事務局を含めて7人。オリエンテーションは、JR 大月駅から車で30分ほどのところにある、旧小学校を改装したNPO 法人の拠点「多摩川源流大学」で行った。

参加者は、まず、源流大学2階にある板敷きの広間で、自己紹介と今日のプログラムに対する思いをシェアしていった。参加者からは、森に入ることによって何を感じるかを期待しているといった声があった。森と未来では、森に入る前にそのプログラムの共通テーマを設定・シェアしており、今回のテーマは「感性」となった。

その後、地元で採れた食材を使った昼食（お弁当）を食べ、車に乗り、源流大学から30分ほどのところにある森へ向かう。

2 TIME FOREST Program

今回、TIME FOREST Programの実施場所となったのは、多摩川の源流の森。参加者は、合羽を着て傘を持ち、ファシリテーターの先導で森のなかへ入る。

足元には木の根っこや岩があり、頭上には樹の枝が生い茂るなか、参加者は、自然にできた土の道を、足元に気をつけながら歩いていく。

途中でファシリテーターから、周囲にある木や土、空気などへ意識を向けていく問いかけが参加者に出される。それらの問いを通して、同じ森でも場所によってにおいや空気が違うこと、木はお互いを邪魔しないように生えていること、それぞれの木が別々に生えているように見えても、森として一つの大きな生態系をつくっていることなどに気づく。

参加者は、ファシリテーターに先導されながら森を歩くことで、自身の内面をみつめるとともに、他の参加者や木々のあり方、雨の音など、周囲へと意識が広がっていく。そして、感じたことや思いをシェアしていく。今回は雨のため、森での体験は予定より時間を短縮し、約1時間となった。

3 振り返りワーク

森での体験の後は、小菅村小学校の隣に立つ小菅村中央公民館で振り返りワークを実施。今回は、森

図表 「TIME FOREST Program」体験会スケジュール

時間	内容
9:40	JR大月駅(山梨県大月市)集合 車で小菅村へ移動
10:20	多摩川源流大学(NPO法人多摩源流こすげ)到着 昼食を取りながらのオリエンテーション
11:30	源流の森に車で移動
12:00	TIME FOREST Program(森を歩く)
13:00	車で小菅村中央公民館へ移動
13:30	振り返りワーク
15:00	体験会終了 JR大月駅まで車で移動、解散

の中で感じたことを12色のクレパスで画用紙に書き、その絵を見ながら、それぞれが感じたことや気づいたこと、絵のイメージなどを共有していった。参加者からは、「今までない感覚を味わった」「いろいろなところでヒトやモノがつながっていると感じた」「雨だったことで、より自分のなかに入ることができた気がする」といった声があがっていた。

最後に、今日のテーマだった「感性」について、森での1日を通してのそれぞれの思いを共有して、体験会は終了した。

*

このほか、森と未来では、森の中にある木や石などから自分に似ていると思うものを探し、その理由を参加者同士で共有する「自分に似たもの探し」や、木を人の人生に例えて観察する「擬人化ワーク」、森の中で目を閉じて、前の人の肩に手を置いて歩いていく「ブラインドウォーク」などを実施している。森という環境を活用したさまざまなワークにより、参加者は自己や他者、社会への理解や共感を深め、それぞれの関係性に思いをはせるようになっていくそうだ。

次頁からは、今回の体験会と森と未来・代表理事の小野なぎさ氏へのインタビューから、森の中での体験による個人の変化、周囲との関わりについて、井藤先生に解説していただく。

森に迷い込むことで、 私たちは何を発見するのか？

東京理科大学 教育支援機構 教職教育センター 教授 井藤 元

「森」を舞台とした本プログラム「TIME FOREST Program」の意義を読み解いていくために、まずは、森の象徴的意味をつかみとることからはじめたいと思います。試みに、これまでにアニメや映画で見たり、漫画や本で読んだりしたものなかで、森が登場する作品をいくつかあげてみてください。どんな物語が思い浮かぶでしょうか。

グリム童話のなかには、「ヘンゼルとグレーテル」など森が出てくるストーリーが数多く存在していますし、ディズニー映画の「美女と野獣」や、スタジオジブリの「魔女の宅急便」「となりのトトロ」にも森が登場します。それらの物語では、主人公が森に迷い込み、彼／彼女に変化をもたらす何らかの存在と出会います。そして、その出会いがきっかけとなって主人公は成長を果たし、最終的にはひとまわり大きくなって元の世界に戻ってきます。不思議なことに、森という舞台で展開される物語には共通の構造が潜在していると考えられるのです。

とりわけ注目すべき点は、それらの物語においては、主人公が目的意識をもって森に行くのではなく、「迷い込む」というところでしょう。ベルは野獣に会うために森を訪れたわけではないですし、キキもウルスラと会うために森に足を踏み入れたわけではありません。それらの物語において、事後的／結果的に森の中で本質的な何かを発見し、元いた世界に戻ってくるという点がミソです。

この点は、「森」と「山」の間に決定的な違いを生み出す重要なポイントだといえます。森は山に含まれることも多いので、両者は一見すると似ているよ

うにも思えますが、象徴的な観点でとらえるならば、両者の性質は大きく異なるのです。

「山」といえば、山頂を目指して下から上へと登っていくイメージがあります。山頂へのルートは複数あるにせよ、一つの方向に向かって上昇していくイメージを有しています（はっきりとした目的地があり、そこを目がけて一步一步、歩みを進めていくイメージ）。それに対して、「森」には目的地というものはありません。「TIME FOREST Program」でも、あらかじめゴールを設定せずに参加者が森の中をさまよって歩くワークが用意されているのですが、ここでも目標地点に到着することは重視されていません。むしろ、森の中を安全にさまよい、そのプロセスそのものに深く沈潜することが、このプログラムでは大切にされているのです。

童話の主人公たちのように「森」に迷い込むことで、参加者はさまざまなこと・ものと出会うことになるのですが、具体的にはそこで何を発見するのでしょうか。以下、小野なぎさ氏へのインタビューを踏まえて、「TIME FOREST Program」のナゾを解き明かしていくことにしましょう。

微細な感覚を磨く

「TIME FOREST Program」のオリエンテーションを終えて、いざ「森」に足を踏み入れ、そこでいろいろなワークを体験していくと、次第に私たちの身体のモードが切り替わるのを感じることができそうです。都会で過ごしている時のようなコスパ重視・タイパ重視のモードが解除され、五感が研ぎ澄まされ

森の中で自然の一部である感覚を味わう



ていくのです。

48頁でご紹介したとおり、このプログラム独自のワークを通じて、五つの感覚が鋭敏になり、いつもよりも多彩な音が聞こえ、匂いに敏感になり、空気の肌触りが感じられ、世界をとらえるための解像度がグッと上がっていることが体感できます。例えば、普段なら聞き逃してしまうような「鳥の鳴き声」が自然に耳に入るようになり、微細な感覚が開かれてくることが実感できます。小野氏によれば、プログラムの参加者から「最近はこの経験をしていなかったな」「子どもの頃は、毎日のようにこういう体験をしていたな」と驚きの声が寄せられるそうです。目的地を設けず、プロセスにフォーカスし、一瞬一瞬を大切に味わうからこそ、都会の生活では眠っていた感覚の扉が開かれるのです。

さて、森で鋭敏になるのは、**視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚**のいわゆる**五感だけではないというのが私の見立てです**。本プログラムでは、5つのカテゴリだけでは把握できない、より微細な感覚が開かれるように思われるのです。

そのことを示すべく、ここで**哲学者ルドルフ・シュタイナーの「十二感覚論」**についてご紹介しま

す。「シュタイナー教育」(モンテッソーリ教育と並び、オルタナティブな教育の代表格)の創始者として知られるシュタイナーは、人間には全部で十二の感覚があると考えていました。彼は人間の感覚を五ではなく、十二という数でとらえなおしているのです。この考え方を補助線にすることで「TIME FOREST Program」がもつ奥行きを浮き彫りにさせることができるのではないかと私は考えています。

ここでは、皆さんのうちにある常識的な考え方(感覚は五つだ)をいったん横に置いて、シュタイナーの理論に耳を傾けていただければと思います。

シュタイナーのいう十二感覚とは、「触覚」「生命感覚」「運動感覚」「平衡感覚」「嗅覚」「味覚」「視覚」「熱感覚」「聴覚」「言語感覚」「思考感覚」「自我感覚」です(図表)。シュタイナー思想において、**十二の感覚は、下位→中位→上位の順で発達していくと考えられており、下位の感覚が土台となります**。これらすべての感覚について、一つひとつ詳細に説明していくと、それだけで紙幅が尽きてしまうので、ここでは「TIME FOREST Program」と特に関連があると思われる四つの感覚(触覚、生命感覚、運動感覚、平衡感覚)に限って解説を行いたいと思

図表 十二感覚

上位の感覚	主として思考の活動に関わる		
聴覚	言語感覚	思考感覚	自我感覚
中位の感覚	主として感情の活動に関わる		
嗅覚	味覚	視覚	熱感覚
下位の感覚	主として意志の活動に関わる		
触覚	生命感覚	運動感覚	平衡感覚

います。

人間の発達において、0～7歳までは下位の感覚、すなわち「触覚」「生命感覚」「運動感覚」「平衡感覚」を育むことが重要とされています。ここで興味深いのが、子どもの頃に、下位の感覚を育むことによって、のちに上位の感覚を育んでいくことができるという点です。

触覚をつうじて世界に接するなかで、子どもは自分の内と外の境界を体験していきます。触覚を十分に育むことによって「私は他とちがう、ほかならぬ私である」という感覚(自我感覚)が培われます。「TIME FOREST Program」では、森の中にあるさまざまなものに触れるのですが、その際、手で触るだけでなく、足の裏で地面に触れ、身体全体で寝そべって大地に触れるという体験をします。生きた自然に触れるという体験は、次に紹介する「生命感覚」や「運動感覚」を呼び覚まします。

では、「生命感覚」とは何でしょうか。端的に言えば、自分の身体の調子を知覚する感覚です。赤ちゃんは生命感覚が活発に働いています。「お腹が減った」「眠い」「気分が悪い」など、身体の状態を全身で訴えます。私たちは普段はあまり生命感覚を意識することはないのですが、疲れがたまっているんだか身体がだるい、重いと感じる時には、私たちは生命感覚によって身体の調子を知覚しています。生命感覚が鋭ければ、身体の調子を自覚することができるのです。けれども、それが鈍ってしまっていると、身体が悲鳴をあげているのに仕事を続け、気がついたら大病を患っているなどということにもなりかねません。

森の中では、この「生命感覚」が鋭敏になると感じるができるでしょう。「これが心地よい感覚なのだ」という正位置がわかり、いかに普段の生活のなかで生命感覚を鈍らせて生きていたかに気づかされます。

次に、「運動感覚」についてです。運動感覚とは、私たちの身体が動いていることを知覚する感覚です。とりわけ、「収縮」と「拡散」、「静」と「動」のリズムを知覚するのが運動感覚です。私たちが長時間デスクワークを続けている(収縮)と、運動感覚がそのことを知覚し、生命感覚が不満を訴え、「散歩したい! 外に出たい!」(拡散)という思いが湧き起こってくることになります。森にも生態系のリズムがあるわけですが、私たちは森を訪れることで、自然のリズム(人間にとっても自然なリズム)と同期し、人間にとって心地よいリズムを取り戻すことができます。

続いて「平衡感覚」は、私たちが空間において直立姿勢を保つために必要なのですが、子どもたちは遊びのなかで平衡感覚を育んでいます。子どもは丸太の上でバランスをとって歩いたりするのが大好きですが、森の中ではそれと同じような体験をすることができます。舗装された都市空間とは異なり、森の中には平坦な道はありません。ポコポコしていたり、ゴツゴツしていたり、ヌメっとなっていたり。そうした道を歩くことで平衡感覚も鋭くなります。シュタイナー思想においては、平衡感覚が育まれることによって、人と人との適切な距離感を測ることができるようになって考えられています。

以上、駆け足で十二感覚論の一部を紹介しましたが、森の中では、ここで紹介した四つの感覚を中心に、嗅覚や聴覚などその他の感覚も研ぎ澄まされます。では、そうした感覚が研ぎ澄まされることにより、私たちに何がもたらされるのでしょうか。

センス=直観を磨く

感覚を研ぎ澄ました先に洗練されるのが、私たちの「直観」です。「直観」というと、エビデンスを示すことのできない、非科学的なものというイメージをもつ人もいるかもしれません。けれども、小野氏はインタビューにおいて「先行きが不透明な今の時代には、直観こそが大切だ」と繰り返し述べていました。本プログラムでは、直観を磨くことに直結するからこそ、全身の感覚を研ぎ澄ませるワークが数多く用意されているのだといえます。

では、「直観」とは一体何なのでしょう。哲学の歴史上、数多くの思想家が直観という概念に注目してきましたが、じつのところ、思想家ごとに直観の意味内実は大きく異なっています。つまり、直観は多義的な概念であるため、小野氏のいう直観の中身をきちんと定義する必要があるわけです。

小野氏の重視する「直観」は、(先にご紹介したシュタイナーに多大な影響を与えた) 文豪ゲーテの思い描く「直観」と一致していると考えられます。ここで、少し寄り道をすることになりますが、「TIME FOREST Program」の意義を読み解くうえで分析の枠組みを獲得するために、以下、ゲーテ自然科学のエッセンスを紹介したいと思います。

『ファウスト』や『若きウェルテルの悩み』などの作者として世界的に知られる偉大な詩人ゲーテは、(あまり知られていませんが) 自然研究に没頭し、独自の自然科学理論を打ち出しており、直観を通じて自然をとらえることの必要性を強調しました。

ゲーテ自然科学の最大の特徴は、ゲーテが(小野氏と同様) 直観を重視した点にあります。直観(Intuition) は、自然を単に漠然と眺めるのではなく、注視、つまり注意深くじっくりと視ることを意味しています。直観によって注意深くみつめれば、自然はおのずからその秘密を開示すると彼は考えました。

ゲーテのいう「直観」の内容を理解するために、ここでは直観を「対象的思惟 gegenständliches Denken」という言葉に置き換えて理解することにしましょう。対象的思惟とは、自然に寄り添いつつ、対象を認識する方法なのですが、これは自然を内側から理解し、対象そのものと一体化する認識のありようといえます。ゲーテは対象的思惟のうちに直観の本質をみていました。ただ、この言葉は耳慣れない言葉で、近寄りがたいオーラを漂わせているので、もう少し噛み砕いて説明することにしましょう。

ゲーテの「対象的思惟」とはズバリ、生きたものを生きたままとらえる認識だとご理解ください。

直観(=対象的思惟)によって、私たちは生きたものを生きたままとらえることが可能になります。対象に寄り添い、対象と同期してしまえば、内側からそれをつかみ取ることができます。私たちは日常生活において、しばしば、固定観念や先入観にしばられることで、対象のありのままの姿をとらえ損ねています。常に移り変わり、変化している対象を既存の枠にあてはめ、「○○とは△△である」と決めてかかることは、ゲーテ的なありようからはほど遠い姿勢なのです。

生きた存在は、絶えず変化していきます。そうした変化に寄り添い、対象を生け捕りにすることがゲーテの自然認識の根本課題なのです。そして

森に触れる





「TIME FOREST Program」は、生きた自然を生きたままとらえるためのワークに満ちています。

例えば、本プログラムでは、森で出会った植物や木々の名称を、積極的に参加者に伝えることはしてはいないといいます（質問されたら答えるようにはしているそうです）。ある植物に出会った際、その植物の名が「ヘクソカズラ」だと聞いてしまったら、私たちのうちに「なんか臭そう！」といった先入観が湧き起こってきってしまうかもしれません。生きた自然と出会うためには、そうした先入観はノイズではないのです。

また、たとえ先入観が生じなかったとしても、名前を知って、図鑑に載っているような説明を聞いてしまうと、その対象のことをわかったつもりになってしまいます。それはガイドブック片手に旅行しているのと同じといえます。目の前にせっかくホンモノの東京タワーがそびえ立っているのに、対象そのものをじっくりと味わうことなく、スマホ撮影に心を奪われ、対象を見た気分になる。そうしたマインドでは、せっかく森に行っても生きた自然に出会うことはできないでしょう。

森は刻一刻と変化し、一瞬として同じ状態に留まることはありません。私が「TIME FOREST Program」

に参加した際にも、森の表情は時間の経過とともに豊かに変化していました。森の中には「これから天気は急変する」などといった情報はどこにも書かれていません。けれども、森の中で直観を研ぎ澄ませ、その場に深く沈潜するならば、天気の変化をいち早く察知することができる、と小野氏は言います。生きた森を生きたまま、内側からとらえているからこそ、そうした変化を感じとることができるのでしょう。

では、なぜ「生きたものを生きたままとらえること」が必要なのでしょう。その答えはシンプルです。森の中で培われる直観が、他者理解あるいは自己理解の際に活かされるからです。

対人関係において、「相手の身になって理解しましょう」というフレーズは使い古された表現ですが、直観を働かせることができれば、単に外側から「相手の気持ちを想像してみる」のではなく、対象そのものになりきって内側から相手を把握することができるようになります。相手のニーズや思いが内側から理解できれば、自ずと適切な対応をとることができるでしょう。

また、このセンスが磨かれるならば、他者だけでなく、生きた自分自身を深く理解することができるようになるといえます。昨日の森と今日の森が異な

るように、昨日の自分と今日の自分も異なります。生きた自分自身のありようを深く認識する（自己認識）ためには、直観（生きたものを生きたままとらえる力）が必要なのです。直観を通じて注意深く自分自身をモニタリングし、どうありたいのか、どうあるべきなのかを高精度でつかみとることができるならば、深い次元での自己理解が可能になります。

さらに、直観を通じて、自分にとって本当に必要なことは何かを見極め、自分自身の本来的なあり方をつかみ取ることが可能となれば、そのことは即、真の創造性の開花へとつながっていきます。

「森」という固有性

さて、「TIME FOREST Program」にはさまざまな効果があると考えられているのですが、とりわけ、本プログラムでは、先にあげた、受講者の創造性を開花させるという側面に注目すべきでしょう。ではいったいなぜ、森で過ごすことで創造性が開かれるのでしょうか。「森で過ごすこと」と「創造性の開花」の間にどのような因果関係があるというのでしょうか。

両者を架橋するためのヒントは、またしてもゲーテのうちにあると私は考えています。ゲーテ自然科学の本質は、盟友シラーによって的確に見抜かれていました。1794年8月23日のゲーテ宛て書簡において、シラーはゲーテに対して次のように述べています。

「あなたは自然の中で、自然をいわば追創造することによって、自然の隠された技法に精通しようと努力されています」（Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe, S.34.）

この追創造 (nacherschaffen) という用語は、ゲーテ思想の重要タームといえます。自然のうちに生きて働いている自然の摂理を、直観によって

キャッチして表現することができれば、追創造が実現される——。ゲーテは、自然の摂理に身を委ねることで創造性が発揮されると考えており、自然の摂理と同期することが創造性を発揮するためのカギを握るとしました。詩人ゲーテが自然科学研究に没頭したのは、彼自身の芸術活動（創造的活動）と自然の研究を行うことは切っても切り離せないと考えていたからです。つまり、自然の摂理とシンクロすることで、真のクリエイティヴィティが発揮されると考えたからこそ、ゲーテは多くの時間を費やして自然と徹底的に向き合ったわけです。

では、あらためて、海でも山でもなく、本プログラムの舞台が「森」である必然性はどこにあるのでしょうか。相手が自然であれば、海でも川でも同様の効果が得られるのでしょうか。否。やはり「森」固有の意義があると私は考えています。

「森」はきわめてホリスティックなありようをしています。「全体論的」とも訳される「ホリスティック」の語源は、「すべて、完全に、完結した」などを意味するギリシア語のホロス (holos) です。whole (全体)、health (健康)、heal (癒し)、holy (神聖な)などはホロスからの派生語で、ホリスティックはこれらの派生語と内的連関を有しています。「TIME FOREST Program」を通じて出会う森は、まさに上記の whole、health、heal、holy の要素をすべて含んでいるといえます。

ここで注意すべきは、ホリスティックな考え方が全体主義的 (totalitarian) なものとは決定的に異なるという点です。全体主義が、ある特定の世界とのつながりを絶対化するものであるのに対し、ホリスティックは個と全体との連関を支配—被支配の関係ではなく、個の存立がつねに全体と共鳴し合い、そうした全体がまた絶えず個へと響いていくような有機的な関係とみなします。「森」はまさにホリスティックな場であり、個（1本1本の木々や植物、生

き物たち)と全体(森そのもの)が真の意味で Win-Win の関係を築いています。

小野氏は、森を「人間社会のメタファー」だと考えており、森の生態系のリズムと人間社会のリズムをパラレルにとらえています。木と水、土、微生物、鳥、動物、すべてが森で、どれも欠かすことができず、お互いが必死に生きるなかで影響し合っています。一つひとつの存在が自立した存在でありながら、互いにつながり合っている姿は美しく、感動的で、そこには人間社会の目指すべき姿が存在しているといえます。山や海では、こうしたホリスティックなあり方を森のように象徴的な形では受け取ることができません。

方向目標と到達目標

かくして「TIME FOREST Program」の受講後、参加者は確かな「方向目標」を獲得することができます。方向目標とは、達成することが目指されるものではなく、そこを目指し続けることに意味がある目標です。

例えば、私たちは「平和」という概念をイメージすることができます。やすらかで、穏やかで、争いがない状態。では、本当の意味での「平和」は、この世に存在しているのでしょうか。世界では紛争が絶えず、真の意味での平和は現時点で達成されているとは言い難い状況にあります。けれども私たちは誰もが「平和」という概念をイメージとしては有しており、そのイメージがあるからこそ、そこに向かって歩み続けることができます。つまり、「平和」という概念は、そこを目指し続けることに意味がある方向目標といえます。対して到達目標とは、文字どおり、到達することが目指されるものです。「売上げ〇円を達成する」「〇月〇日までに納品する」といった目標は、達成することではじめて意味をもつものといえます。

真の意味での平和の実現が容易には果たされないように、「森のようにホリスティックに生きること」を日々の生活において完璧に果たすこと(つまり到達目標にすること)は難しいでしょう。けれども、森のように生きることを方向目標として掲げ、その姿をイメージとして描くことで、組織や社会が歩むべき方向性を獲得することができるのです。そのイメージは都会の生活に戻っても決して消えることはありません。

*

以上、「TIME FOREST Program」の意義を私なりの観点から読み解いていきました。本プログラムを通じて複合的な効果を得られる受講者も多くいるはずですが、感覚を研ぎ澄ませ、直観の精度を上げることにより、人間関係が組み替えられ、自分の本来的なあり方に気づき、創造性が開花する、といった具合に。本プログラムの効果は、チームビルディングやリーダーシップ開発、自己理解やモチベーションアップなど多岐にわたるのですが、当然といえば当然です。それらの課題は、一見すると別々のようにもみえますが、森と同様、根っこではつながりあっているのですから。

先に述べたとおり、本プログラムは受講者に方向目標を与えてくれますが、それを獲得することで具体的に何を発見することになるかは、(童話の主人公たちと同様)事後的・結果的にしか明らかにならないといえます。何に出会えるかは参加してからの楽しみ。いずれにせよ、「森」を訪れて本プログラムに参加すれば、現在のライフステージにおいて最も必要なものにきっと出会えるはずです。

【参考文献】

井藤元『マンガでやさしくわかるシュタイナー教育』(日本能率協会マネジメントセンター、2019年)
大村祐子『家庭でできるシュタイナー教育』(ほんの木、1999年)
Schiller, J.C.F. & Goethe, J.W.: Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe, herausgegeben von Staiger, E., (Insel Verlag, Frankfurt am Main und Leipzig, 2005)